

## 全教神戸との交渉議事録

1. 日 時：令和5年12月20日（水）17：10～18：30

2. 場 所：教育委員会会議室

3. 出席者：

（市）教職員課長、労務制度担当係長、他5名

学校経営支援課長、運営係長、情報管理担当課長、情報化推進担当係長

特別支援教育課長、特別支援教育推進担当課長、特別支援教育相談センター担当課長

教科指導課長、中等教育係長、中等教育担当係長

（組合）委員長、副委員長2名、書記長、書記次長2名、他4名

4. 議 題：勤務労働条件にかかわる団体交渉

5. 発言内容：

（組） それでは、学校経営支援課さんに対しての交渉を早速お伝えしたいと思います。

まず、「1－1教職員の勤務実態の内容を踏まえ、慢性化日常化している超過勤務の実態を調査し、早急に改善にあたること」ということで、権限移譲のときに、権限移譲をされてからこの学校経営支援課さんが立ち上がられて、実際に現場の実態に耳を貸していただき、いろんところで具体的な方策を取ってきていただいたことについて我々は十分承知しております。また、アンケート等も取っていただいて、現場の生の声を大切にいただいていることも感じております。ですが、まだまだそれに見合っていない、超過勤務が解消されていない今の実情というところを生の声としてお伝えしたいと思います。

まず、超過勤務の実態の調査ですけれども、ICカードによって勤務実態というのは、それを使うことで明らかになってきた部分もありますけれども、以前から交渉の中でお伝えしていた、要するに、カードをかざしていないところでの業務というのがあります。例えばですけれども、勤務時間が8時15分でもその何時間も前から出勤しているとか、退勤時刻というところもあまりにもその時間が長過ぎるとそれが産業医の面談の必要性、あるいは学校全体の問題というふうにしてしまうということでも持ち帰り仕事にシフトしていつているというところ、特に最近感じますのは持ち帰り仕事です。1人1台の端末をもらって、これだけ業務改善が進んだところも確かにありますが、逆に持ち帰って仕事ができるしまう。要するに、学校でしかできない仕事は学校でやって、残りは個人でパソコンでできる仕事はもう家でやらなければいけないみたいな空気が今も現場の中には当たり前のように蔓延しています。学校の管理職も指導対象になり、早く帰ろうという呼びかけが職場の中でなされ、もちろんそれによって我々の意識改革として進んだところもあります。いつまでも遅くただらと仕事をするのではなくてけじめをつけてやりましょうとか、ゴールを設定してそれまでに仕事をやりましょうなどとありますが、我々の仕事はゴールを設定しようと思ったらそのゴールの残りを持ち帰ることでしか、要するに、仕事が消化できない実態があります。我々の仕事がどれくらいあるのかということとは恐らく知っていただいているとは思いますが、勤務時間内

に終わる仕事の量ではありません。それを減らすことをしなければ、いくら働き方改革といっても家に持ち帰ったりとか、あるいはキーボックスで誰でも開けれる、誰でも閉めれる学校になったのは、確かに管理職はそれで楽にはなったんですけども、結局そのことで、我々も別に土日出勤したいわけじゃないけど出勤してやっと辻褄が合うという状況が現場の中にあるということを切に訴えます。特に持ち帰り仕事に関して、今までの交渉の中で、一体持ち帰り仕事がどれぐらいの時間あるのかを調査してくださいという話の中で、できないことはないけれどもパソコンを開けている時間イコール勤務しているというふうにも換算できないということや、膨大な時間、膨大な費用がかかるというところで話が止まってしまっているのですが、もちろん、そこは自己申告という形でしか家の中まで仕事をしているかどうかをチェックするわけにもいきませんので無理だとは思いますが、現場はほんまに一日張りついて見ていただいたら分かると思うのですけれども、本当に丸つけ一つできません。

子供たちが帰るまでは我々の仕事は何が起こるか分からないというふうな部分もあって、それでその後会議もあります、打ち合わせもあります。その中で減らしていくべきものがあると思います。また具体的な話が出てくると思いますが、これだけ業務改善と言っているのに減っていないのが、通知通達。これも学校経営支援課さんのほうで減らしていくように指導していただいているところも分かるんですけども、また増えてきています。それを全部見るだけでもすごく時間がかかる。本当にパソコンに向かっている時間がどれだけあるのかという感じです。

次に、報告文書。これも大分減らしたというふうに働き方改革が始まった頃はおっしゃっていたのですが、今、すごく増えてきています。特に後から出てくるんですけどもICT関係のこと、GIGA端末のこと、そういった報告あるいは字数のことである教育課程のことなどすごく細かく報告しなければいけない。また、生徒指導のことの報告もえています。今、現場の状況、あるいは社会の中での学校というかそういう厳しい状況に置かれているのは分かるのですが、じゃあその報告なりをしているのは誰かという、これ、我々現場の人間で、要するに仕事が増えています。だから、新しいことを導入するのであれば何かを減らしていかないといけないのに、減ってきた部分もありますけど増えてきた感のほうがすごく多く感じます。特にICTに関しては我々はその専門的な教育を受けたわけでもありませんし、それに向けての専門的な研修を受けたわけでもないにもかかわらず、次から次へと新しいことが導入されて、しかも今、それをやらなければいけないというような教育委員会からの引き締め、縛りというのがどんどん強まっていて、現場の中では不平不満が相当な数出てきています。そのほかにも英語が教科専任がある学校とない学校でありますとか、いじめ事案や不登校の問題など、現場では問題を抱えているんですけども、いじめ一つ丁寧にアンケートを取っていかうと思ったら、結局その時間は休み時間や放課後に費やされ、それで調べたことをまた保護者に丁寧に説明しなければいけない。勤務時間内に終わるわけがないですね。減らしていく方向にするならば、人を増やすしかないと思います。要するに、授業をする、学級、子供たちと向かい合える先生たちと報告をする先生や統計を取ったりする先生という形

で、それは教員に限ったことでなくてもいいと思いますが、やはり仕事のシェアをしなければ今は、結局は全部抱えている、現場の教員が抱えている、なおかつ休んだり、教員が休んだりした場合に、それをみんなで仕事をシェアしていつているという、そういう状況があるということを訴えたいと思います。

2つ目は「自己都合の退職者が増えている」というところで、教員採用に関してはかなり神戸市は他の都道府県に比べて思い切った人数を採用したり、また、他府県の即戦力になる教職員を別途で追加募集したり、いろいろなあの手この手で採用の方法について研究、そして改革されているなど分かります。ただ、今いる現場の人間がどんどん辞めていつている状況というのは一体何を示しているのか、表しているのかということ。確かに、介護の問題であるとか今の社会状況のしんどさはあるんですけども、やはり今の現場がもうもたない、今の現場の状態では働けないと、辞めたいわけではないけども辞めていつている現場の同僚、いっぱいいます。やはり、行きつくところは今の現場を何とかしなければいけないというところに行きつくと思います。そこら辺の部分の自己都合退職者がどんどん増えていつているところをどう捉えられているのか、内容としては教職員課の問題にも関わるとは思うんですけども、学校経営支援課さんのほうのお考えをお聞かせください。

次に、ICTの問題です。ここに書かれてありますけれども、これからの時代、ICTが必要になるのは重々承知していますが、じゃあ、今まで大事にしていた読み書きそろばんであるとか基礎学力の定着でありますとか、できない子供への丁寧な指導というものはどうなるのでしょうかということ。やはり、新しいものを入れていくということは、同時に何かを減らしていかないと結局は増えていつて、辻褄を合わせようと思ったら何かがおろそかになってしまいます。ICTが目的になってしまっていないか、本当に子供たちにつけなければいけない力というのは何だろうなということ。今、ちょっとそれを逸脱して授業内容や授業方法にかなり教育委員会が踏み込んだ通知通達、あるいは調査というものが行われていると我々は思っていて、もちろんGIGA端末を使うことで進む教育もありますけれども、そのために費やさなければいけない時間であるとか、それをするのであればもっと違うところに時間を使わないといけない授業もありますし、1週間にどれくらい使ったかとかいうその時間数だけで本当にいいのかというところは切に訴えたいと思っています。

また、子供たちが1人1台持つことによって起きている弊害、ここに具体的にアダルトサイトがGIGA端末で見れてしまうであるとか、それを使っての子供同士のトラブルであるとかというところで、これを持たせていることへの弊害についてどういうふうにして今後変えていくのかという部分。あるいは、ここには書かれていませんけども保証の問題ですよね、保証するためにICT担当がその新たな仕事として新しいパソコンを調達するとか、あるいは無くしてしまったらそれを警察に紛失届を出してみたいな、今までにはないようなそのような仕事をやっていますので、普通の担任が、すごく負担になっています。その辺り、どうでしょうか。

最後に、学習履歴や健康診断の記録、やがて学力調査もGIGA端末でできるように、子供たちが自分で打ち込めるようにという方向に国自体が動いていますけれ

ども、その記録がどこに活用されるのかということ非常に危惧しています。学校が配ったG I G A端末でアダルトサイトに入ってしまうような、そんな状況で、果たして子供の個人情報を守られるのかどうかというふうな部分も非常に気になっております。

以上、我々のほうからの訴えです、よろしく申し上げます。

(市) それでは、学校支援課長の〇〇です。私のほうから前半の部分のお話をさせていただきたいというふうに思います。

働き方改革についてですけれども、教員の、教職員の勤務実態については今後も継続的に把握・分析するとともに、学校園メンバーの意見を参考にしながら教育委員会と学校園が一体となって多忙化対策に取り組んでいきたいということは、これは前々から、今年からじゃなくてずっとこれは続けていることですし、これからも続けていくというような意味合いでございます。そのためには、教育委員会による支援策と併せて保護者、地域社会の協力、さらには教職員の意識改革が必要であるというふうに考えておまして、引き続き実効性のある取組を推進していきたいというふうに考えております。

これも以前から保護者の皆さんですとか地域の方々との協力というのはもちろんある話ですけれども、やはり、こういったこともずっと訴え続けていかないと学校への負担がますますと言いますか、全く分散されないというところがあると思いますので、こちらについては広く訴え、取組を発信していくということを進めていきたいというふうに考えております。

令和3年度から、より一層子供たちと向き合って真に必要な教育活動に力を注ぐために、令和における学校の活動、「令和の時代における学校の業務の活動」というものを作成しております。第1弾、第2弾ということですね、させておられますけれども、こちらは教職員の働き方の観点も念頭に置きながら、学校と事務局の業務や活動について令和の時代にふさわしいものを、やはり長年教員でおられると昔のものをそのまま引き継がれているというか、なかなかやめるにやめれないという部分もあったかと思えます。それを一定示すことによって、思い切ってやめることのきっかけになるということもございまして、一定の具体的な業務を出しながら学年だよりと学級だよりを一緒にするだとか、何か無くせるものはないかというようなことの観点で、当たり前のことを見つめ直してこれを提示するというのをさせていただきます。

今後も教職員の勤務実態について継続的に把握・分析しながら、実効性がある取組を推進していきたいというふうに考えているところでございます。

(市) では、引き続きICT関係のお話をさせていただきます。

今、委員長から御説明がありましたことからも御要望がございましたとおり、ICT化は日々、現場の方々は大変ということはよく存じ上げております。ただ、目的がパソコンをとにかく使うことになってないかという点、話がございましたけれども、基本的にはそうではなくて、やはり、国全体が子供たちが情報化社会の中で生きていくために、今後、情報を活用する力というものが必要だろうということで、この教育機関にパソコンが配備されて活用されてという話の真意がありますので、

とにかく何でもいいから蓋を開けて運営せよということではございませんので、そこは御理解賜りたいと思います。

このパソコンの不適切なサイトへのアクセスです、御心配のことかと思うのですが、けれども、皆さんも御家庭でもパソコンを買いますとウイルス対策ソフトというのが入っていると思います。神戸市の子供たちが使っている学習用パソコンもそういうウイルス対策ソフトというものを入れています。不適切なサイトに対してはアクセスしないような制限をしていますが、このソフト自体も実は世の中にいろんなそういう不適切なサイトというのは時々刻々と受けていまして、それを受けてそこにブロックをかけるという仕組みになっております。ですので、どうしても抜け道がいついてしまっていて、時々刻々新しい不適切サイトができるものに対してすぐに対応できていない面もあるのは確かであります。これはもしできていたものが正規になりましたら我々も採用したいなと思うぐらいなんですけれども、世の中にそういうものが現実ないものですから、今入っているソフトで対応しているということになるんですけれども。御存じかと思いますが、そういった不適切サイトがあると、我々に教えていただきますとそのサイトをブロックするような運用をしております。その申請もなるべく手間のかからないように教育のイントラの中にトップページのところ、申請するコーナーみたいなものがあって、そこから当該サイトの申請をいただければと思います。ですので、これはどうしても技術的なところがあるもので、都度こんなサイトがあったみたいな情報を提供いただくという行為ですけれども、現状としてはそういう運用をさせていただいております。

あとは故障のお話があったと思いますけれども、故障につきましても、確かに、端末配付以降、年々故障の数が増えてきているのは間違いありません。現場のICT担当の先生が大体若手の方が多いですけど、御一人奮闘されていらっしゃるというパターンが多いようです。私も着任して以来お話を聞かせていただいて、故障の端末がないですよといったら現場に行ってみることもありますが、大体その状況は確認しておりますが、一つの手だてとしましたら、ICT担当の先生御一人に任せるのではなくて、複数の方々で対応していただくというふうにしたらどうですかとお話をします。どうしてもやはり若手の方々もICTに明るいだらうというイメージがあって、若手に押しつけるのではないとは思いますが、その人に適性があると思ってやってらっしゃると思うのですけれども、そういう仕事が回ってくる。その方は担任も持っておられるからなかなか仕事ができないところもあって、大変かと思えます。けれども、やはりその人御一人に押しつけるのではなくて複数でやっていく、学年ごとに学校の担当者をつけて行って学年全体を取りまとめる担当者をつけるというふうなやり方というような、どうですか、できないですか、学校を挙げてできないですかというお話はさせていただいております。ですので、ICT担当者が孤立しないようなやり方というのがいいのかなと、現場に行かせていただいたときにはそういうお話をさせていただいております。

それから、学習履歴とかのデータのことですか、こちらも個々に関しての通達があったと思いますけれども、理事長がおっしゃるとおり個人情報の保護というのは非常に大事なところでございまして、実はこれまで神戸市は他の政令都市に比べて

かなり厳しい運用にしています。保護に対しての厳しい方向で、逆に自由度がないというような御意見もあったように思いますけれども、やはり子供たちの個人情報というのは保護すべきものですよね。それと保護法という保護の取組が定められているのがありますから、それに応ずるようにするのですが、前提としましては学習の目的で使うということで、それ以外にもし個人情報等を運用するときには、基本的には本人同意があるという前提で利用するということになっております。今まで運用してきた中での個人情報の保護に対する取組というのは変わらずやっていく予定でございますので、現状としてはそういう状況だという理解がいただければ幸いです。

(組) すみません、青陽須磨支援学校の〇〇です。お忙しい中、いつもありがとうございます。

I C Tに関わることでお伺いしたいなと思うことがあります。

まず、学校教育の中でI C Tをどのぐらい進めるかということの権限が神戸市にどれぐらいあるのかなというのが、まず1点。それで、委員としては、さっき言ったそのI C T化というのは、学校現場ではパソコンを開いている人は測れ、どれぐらい使っているかそれを取れ、それがI C T化を使ったことになるんだというような話がちょこちょこ出ているというのが聞いてみたい。それってさっき言った本末転倒じゃないんですけど、子供たちがこういうふうになってほしいから、じゃあI C T使ったらいいよねというのと全然位置が逆になってるなという感じになっていきます。それで、そういう状況が生まれてきている背景に、僕はそもそもG I G Aスクール構想って皆さん御存じだと思いますけど、経済産業省が出している案件ですよ、文科省じゃなくて。それってどういうことかということ、結局そういうI C Tツールというのをを使って、学校現場で民間企業がお金を儲けようという意図も入ってきていると僕は自分で勉強してきて思っています。そういうことに関して、さっきあった個人情報流出というものに関わってくるんですけど、G o o g l eがやってきたビジネスモデルって無料でばんと使えるようにして、そこから個人情報をどんどん吸い上げてそれを売るということをすごいやっているんです。だから、そういう道もG I G AスクールとかI C Tという背景に、やはり道を開く要素があると思っています。そういうことに関して神戸市として、ちゃんとそういうことを皆さんで学んできて国に対して言われているからやっているとかじゃなくて、こういうところは教育委員会の公式見解として考えてやっているからやっているという考えがあるのか、それともそういうふうにならある程度言ってきているからやっているかということで、どういうふうを考えているのかなというのは今の回答だとあまり見えなくて、その管轄されているところじゃないからしようがないよなと思うところももちろんあるんですけど、やはり子供のためにI C Tをどう使うかということをどういうふう考えているのかなというところを、ちょっともう少し関連した質問として聞かせてもらいたいなと思いました。

以上です。

(市) 多分両方あるだろうなとは思いますが。当然、日本全国でG I G Aスクール構想が始まっているという背景がありますから、国の施策として日本国中の子供たちがこ

のICTに取り入れるという環境を整えてきているわけです。それが背景にありますし、併せてその環境の中でホームページがどういうふうを活用していくかという取組だと思います。その具体的な取組につきましては、私どももちろんそんなですけれども、今、〇〇さんがおっしゃるように、具体的にこういうのですよという、ばんというのがあれば、今回お伝えするのはなかなか難しいところなのでその辺をちょっと御理解いただければと思います。

(組) 多分、その辺りが教員としては、一教員としては子供たちにこうなってほしいからこういう授業をしようというのが絶対ベースだと思うんですけど、それは特別支援学校に僕はいるんですけど一緒だし、一般校も一緒だったので。だから、そうじゃないことをやらせているということの違和感だと思います。だから、そこを何かこう、こういうふうなことをすることで子供がこうなるんだという考えがあったら示して、それで、だからこういうデータを取ってほしいとかっていうことだったら分かるんですけど、そうじゃないところがこう思ってしまうところがあると思うので、多分、そういう部分に関してもうちょっと整理したりとか、教育委員会としてはこういうふうを考えるからこういうふうにしてほしいというところをはっきりもう少し出してもらったら、僕らとしても意見を言わせてもらったり言いやすいと思います。1個は大人の都合で、やはりもっと大きいところで動いていることに、やはり教育委員会としてもできたら頑張っって押し返してほしいじゃないですけど、してもらえたら個人的にはすごくうれしいです。

(市) 貴重な御意見で大変参考になりますし、ただ、ちょっと御理解いただきたいのは、パソコンを開いている時間を測れというふうに我々は言うてはいないです。少なくとも我々の課はパソコンを開いて時間を計測しなさいよというのはやっていないと思うので、そのお話をどこからなのかが。

(組) 多分学校単位で言われているのは、その使用頻度を増やせというでした。

(組) 子供たちにアンケートを取っていますよね。小学校だったら5、6年生。中学校でも取っています。

(組) 授業の中で何回やりましたかとか、それをまとめてどうやってこんな授業に使っていますかとか、結構細かいところで本当にそれを使っているか、使っていないかを調べるためのアンケートを子供らにさせています。それも結局授業中を使わないといけないので、本来授業をしないといけない時間に、そのために時間を割いています。

(組) それこそ子供の意識調査じゃないんですけど、何か使っている感を出してくれと僕は職場で校長から言われました。

(組) 今、そういう状況に現場があるというところです。だから、学校支援をしていたらいる学校経営支援課さんに、まずこういうことを分かっていたきたい。

(市) そうですね、委員長がおっしゃられるように、我々の所属というのは裏方と言いますか、その辺を見回らせていただいているものですから、すみません、ちょっとアンケートは分からないところがあります。

(組) 僕からもちょっと言わせてもらっていいですか。

1つは、業務改善をずっと言われていて、僕も去年、一昨年と2年、ちょっと現

場を離れていて、実際に帰ってきてすごく驚きました。その3年前からもこの教職員の意識改革が必要だと書いてあって、ずっと書かれていると思います。今日、経営支援課として教職員の意識改革はどれくらい進んでいると思われていますか。私が、4月に帰ってきてまず驚いたのは、やはりいい部分もあるしすごく進んでいる部分もあるし、危機感も持ちました。まず1つは、職員会議で悪気があってじゃないですよ、4月最初の若い先生が職員会議の司会をしたときに、「職員会も今日もスムーズに進むようにしましょう」と言っていたんです。いや、スムーズに進むのはすごく大事だけど、やはり職員会とか会議をする時間、議論を交わす時間、子供にとってどういう教育が必要なのかという時間自体が削られていくというのは本当に本末転倒だと思っています。もちろん進んでいる学校進んでいない学校あると思いますが、無理やり人を入れないうちで働き方改革をしていくと、本来僕たちが大事にしないといけない教育の根幹部分の子供の実態に合わせた教育とか議論を重ねてやっていくということではなくて、ちょっとこれは支援課から離れますけれど、学力をつけるだけの、結局は教材研究をする時間がなくなって指導書だけを見てやるようなマニュアル化が進められていて、本当に誰でもできる教育となっていくのではないかな。ある都市ではスカイメニューで、いい部分もあるかもしれないです。でも、子供たちの健康管理で「にこにこ」「普通」「駄目」みたいなんで、そういうスカイメニューみたいなので一斉に見られますが、これが進んでしまうと、本当に僕たちが大事にしたかった子供たち一人一人の声色であったりとか表情であったりとか服の汚れ具合とかというのを見て、僕たちはその子に合わせてこの子にどういう手だてが必要かなとやってきたはずですよ。でも、本当にICT化とか時間がなくて無理やり削られていく人員がいないうちでやられていくと、本当にもっと子供たちに寄り添わないといけない、その裏側に保護者に寄り添わないといけないところが削られていっているなと思います。

退職の理由は、僕は多忙化だけではないと思います。やはり、もっと教育に自由度があって子供たち一人一人と呼吸を合わせるような教育ができなかったら、教職という仕事には魅力はないと思います。だから、そこの辺りを経営支援課としてどういう方向性を見ているかというのを教えてください。

あともう一つは、割り振りで申請がすごく大変です。1件申請して管理職2人にオーケーしてもらって、また次の申請をするというのはすごく負担です。それを複数登録にしてもらえないかというのと、申請したら1回1回言いに行かないといけないんです、「教頭さんがいけたから、じゃあ校長先生」といって、ずっと回ってるんですけど、それを管理職通知でぜひ、申請が上がってきたらポップアップみたいなので通知が上がるようにしてもらえないか、それはシステムで変えられるんじゃないかなと思うので、そこは検討していただきたいと思います。

以上です。

(市) ありがとうございます。

私のほうから前段のところですけども、まさにどのくらい進んでいるかということですけども、私たちもそれに関して、やはりやり方としてはアンケートということが出てくるんですけども、まさに今日から「働き方改革に関するアンケート

ト」を実施させていただいております。イントラのほうでも先生方が見れるような形で、本日からですけれどももう数百回答がきているという状況ですので、非常にありがたいなと思っております。昨年よりも忙しさとかどうなっているかとか、そういったことをあまり長くするとやはりそれ自体、アンケートを答えること自体が負担だというふうに出ないように短縮といいますかコンパクトにしていますけれども、来月いっぱいまでしております。それで、自由記入の欄もつくってますので、皆さんが今、働き方に関してどう考えているかというのを集め、声を聞きたいというふうに思ってますし、当然事務局に今年度から新しく、昨年度まで現場におった方が来られている方がたくさんいらっしゃいますので、そういった方の話を聞くようにして、こういった業務がいらんんじゃないかとか、それは逆に残しておいたほうがいいんじゃないかとかという、やはり私らもどうしても時間とかということのを削るということを念頭になってしまうんですが、ここは成長段階における子供に対しては必要な業務なんではないかとはいえますので、やはり現場の方々の意見を取り入れながら進めていきたいというふうに思っているところでございます。

割り振りの申請につきましては多分絡むところなので、我々、普段の業務から技術相談を受けておりますので、今日は時間があれなので、また相談いただければと思います。

(市) それでは続きまして、特別支援教育課との交渉に移らせていただければと思います。

(組) 執行委員の〇〇と申します、本日はよろしく申し上げます。

特別支援教育のことについては、特別支援学校、支援学級、それから通級教室、それから通常学級への支援と、本来であればたくさん要求したいことはあるのですが、今回は2点交渉させてください。

まず2-3の「特別支援学校の設置基準については、神戸市独自で双方にも基準を満たす努力を行ってほしい」と述べております。ここ10年ほどで支援学校のほうが改編されたり新しい学校がつくられたりというふうに、大きく変わっているとは思いますが、ただ、やはり支援学校に通いたいという子供たちが多く、教室が足りていないという現状があると思います。先月、〇〇課長のお話を聞かせていただいたんですけれども、やはり教室環境であったり物の環境を整えていくことということが物すごく大事なことだと思っております。ただ、やはり教室が足りないという状況の中、物が廊下にまであふれてしまうであったりとか、なかなか片づける場所がないというような現状も出てきております。また、子供たちがクールダウンするスペースがなかったり、教室が狭いことがあったりということも起きていると思います。私自身は支援学級に現在勤めているのですが、支援学級でも教室が足りないという現状もあるような勤務校で、今、働いています。1つの教室をカーテンで2つに仕切るということは、隣で1年生が泣き叫んでいるような現状があっても、その隣の教室には音に過敏な子供たちがいて不安定になる。教室が不安定になると、やはり担任も疲労していくということが起きています。私自身は小学校で勤務しているので、そういう環境になってしまうと大人の支援が必要になってきて、職員の働き方というのもしんどい状態になっています。教室が足りなければ、子供はもち

ろん働く私たちにとってもやはりストレスが高い状態になっていくところがありますので、しっかりと基準を満たしていただきたいと思います。

それに加えて、4の1のほうになります「特別支援学校を新設し、学校の小規模化とともに児童生徒の通学時間の短縮を図ること」を考慮いただきたいと思います。やはり、児童が多過ぎて教室が足りないということ、それだけではなく、職員室が狭くなっていること、同じ1つのスペースの中で中学部の先生がスピーカーで職員のように話しかけたりというのを、その隣では小学部の先生であったり、職員室が狭いということも課題として上げられると思います。十分な教育を行うためにも、また、働きやすくしていくためにも、支援学校の新設を検討していただきたいと思います。支援学校に勤めている者がほかにもいますので、付け加えをお願いします。

(組) 書記長の〇〇です。灘さくら支援学校に去年と今年度と常勤講師という立場で務めさせてもらっています。去年4月に初めて学校に行かせてもらったんですけど、きれいな学校でいいなと思って、こんなところで最後働けたらうれしいなと思って去年の1年間を過ごさせてもらったんですが、今年、クラスが1つ増えました。僕は小学部の知的部門にいますが、ホームルームの教室が足らなくなって多目的ルームという広い部屋があって、そこを3つにパーテーションで区切れるようになって、今は3つの部分の2つを使っています、合計6クラスあります。この秋に就学の来年度の新しい新入生は何人来るのだろうかということやってきましたけど、また増えるらしく、今6クラスあるところが8クラス。その3つに区切って両端の2つを使っていて、真ん中は空間の空き教室になっているわけでそんなにうるさくないですけども、その真ん中の教室にも1つクラスを作らなくちゃいけないだろう。それでもまだ1つ足りないの、そこを教頭先生に聞くと3つに分けているところを4つにするといいんじゃないかな、みたいなことを、どんな計画になっているのか詳しくは聞いてないですけど、今ある小学部の知的の部門のフロアはもう満杯になっていて、来年度はどうするのかと気になるところです。できてまだ2年になってないですけど既にそういう状態になって、最初につくられたときの計画がどのようなものなのか、もうちょっと丁寧に先のことを見越して計画を立ててもらえたらよかったのになということを考えながら、今、働いています。その前は青陽東にいましたが、青陽東でもこういう問題があって、僕ときは現役で管理部長とかもやらせてもらったりしていました。職員室に先生の机を入れるのが大変で、寸法を測って机がなんぼ入りますかねみたいなことをみんなで相談しながらやった記憶があります。それと似たようなことが今度の灘さくら支援学校でも起こりそうな気がしています。やはり、設置基準を満たすということは新しい学校をつくってもらうことになるんじゃないかな、それ以外に何か方法がありますかね。だから、新しい学校になると、今度は国が決めた設置基準を満たさなければならないということになりますけども、そういう学校を増やしていただけたらどうかなと思います。働いている者としてはちょっと息苦しい感じになってきています。

(組) 青陽須磨支援学校の〇〇です、いつもありがとうございます。

青陽須磨、そうですね、やはり来年、かなり生徒数が増えるので教室が足りないという話で。この前、高等部やったビルメンテという部屋があって、そこを潰して

教室にできないかという申請をしているみたいな話を校長はされていたので、やはり、一番困るのはパニックになった子が落ち着く場所というのがどんどんなくなってきていて、それがやはり、特別支援学校なのにそれでいいのかなというのはい日々感じています。小学校や中学校にそれはあったほうがもちろんいいと思うんですけど、そういうスペースが余分にいる子供たちが集まっている学校だと思うので、そういうところを整えるというのは子供にとってはすごくいいことだし大事だとは思っています。

(市) お話を聞かせていただいて、皆さんそれぞれの場所で公私ともに頑張っていただき本当にありがとうございます。

私たちも特別支援学校ですね、皆さん御存じだと思いますが、神戸市は青陽須磨から始まりまして、特に須磨以外は温水プールが全て完備している、廊下も全て空調があるというふうにして、非常に、特に灘さくらなんか最新の設備を入れているようなところでやっておりまして、教育課程でも先生方、本当に頑張らせていただいています。新しい学習指導要領に基づいて御苦労もしていただいて頑張っていた、実態把握もしっかりできているというところもあるので、私たちも想定以上に神戸市立特別支援学校は人気です。保護者が見学に行くと、「こんなすばらしい環境で、先生方、こんな教科学習までしているのか」というのを聞いて、私たちの想定を超えて、やはり地域の学校よりも早めに特別支援学校に来たいということで増えているという現状があります。なので、私たちとしてはうれしさもある反面、じゃあどうしても地域の小中学校、特別支援学校が駄目かというところもあります。ですので、環境はできる限りのことを他課とも連携しながらやっていきたいのがありますが、私たちがちゃんと見極めていかなければいけないのは、どんなふうにこの児童生徒数が推移しているのか。御存じのように義務教育段階の子供たちは1,000万人を切っている、今から減り続けているので、今のところは特別支援学校に係る子供たちは増えているというのは実数が減っていますので、いつまでも特別支援級に係る子供たちも右肩上がりというわけにはいかないだろうと、そこも見極めながらやっていきたい。今ある環境については各校改修もしていると思いますが、子供たちにとって学びやすい環境、先生方にとって教育しやすい環境というのはできる限り他課も含めてやっていきたいと思っておりますので、今後とも万全にはいかないですが、御協力いただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(組) 私たちは教員の立場で我慢できるところは我慢していかなければと思っておりますが、やはり子供たちに我慢をさせるというのは、それはどうなのかなというのがあります。

(市) 私たちも広ければよいというものではないと思ひまして、その子供の人数に応じた一番落ち着くスペースというのが本当はあると思ひます。1個聞いておりますのは、広過ぎたら子供が、言ったら、スペースがあるので走ってしまって、そこで思わぬ子供同士のけがになってしまうと聞きます。そのときにどういうことがあるかといったら、ちょっとゆとりがあり過ぎるスペースがある上にそういう子供が走ってしまうという。それだったらそうじゃないスペースというのも考えていく必要が

あるので、難しいですけれども、各学校のできるところで私たちも話を聞きながら対応して考えさせていただきたいと思います。またよろしく願いいたします。

(組) 今の特別支援学校の規模で、よく御存じだと思いますが、教室が潰されていって、結局子供たちの学習権が奪われている状態だと思います。特別支援学指定、あとはこれからの次ってなかなか分からないと思うんですけど、今の学校の状況でいく予定なのかというのは、どういうふうに見られているんですか。

(市) 今の推計ですね、おっしゃるように難しいので、どうすれば正しい推計が本当に先のためになるのかというのを、ちょっと今はまだ計画段階で、それもなしにやみくもにというのがありますので、そこはちょっと私自身時間もかけられないです。しっかりとしたものができるようにというのは取り組んでいきたいとは思っています。

(組) 私、青陽東に11年もおったんですけど、最後のほうで新しいHAT神戸の学校、小学校と併設してやりますというのを聞いて、そうなるのかなというて転勤したんですけど、10年前です、ほぼ10年前、8年前、9年前のときも同じように子供の数はこれからどんどん減っていくんだということで、規模はこんなもんだらうみたいな計画やったかなと思うんですけど、その読みはちょっと外れてしまったのかなと思うんですよ。だから、特別支援教育というのは障害児教育の考え方というのもずっと2006年頃から変わってきておりましたが、それに見合ったような神戸の学校の支援学校の在り方、そういうものを考えていただけたらどうかなと思います。10年前に「きっと子供の数が減るから大丈夫だろう、これでいこう」みたいな話やったように最後記憶しているのですが、それがうまいことってない。今後、神戸で新しい市立の支援学校を建てるような計画は今のところ出てきてないですか。

(市) 今のところ計画としては、具体案としてはないです。

(組) 青陽須磨の〇〇と申します。

児童数が増えたというのに加えて、教材教具が増えて置く場所がないということも踏まえて検討していただけたらなと思っております。学習指導要領が変わりまして、理科備品を購入したりして、言語聴覚室がよくて学習に適した部屋があったらそこに教材を置くしかなくなったりもしております。なので、そういったところでも本来学習すべき部屋が物置部屋になっていっているという実態もお伝えできたらと思います。

(組) 〇〇です。二つちょっとお伺いしたいんですけど、一つは、今、子供の出生率とかで多分検討されているんですけど、もう1個、移民という問題が物すごく大きくなって、御存じなのかなとちょっとお伺いしたくて、日本は割と移民政策が厳しかったりするのでヨーロッパモデルとアメリカって今、まねしてきていて、安い労働力をばっとうれたらいろいろ解決できるという考えがあり、僕も詳しい数字は分からないですけど最近知ってびっくりしたのは、今、日本は移民受入国世界第3位とか4位ぐらいまで来ており、物すごい数で増えてきて、多分皆さんも実感があると思うんですけど、電車に乗ったら外国の方が増えたとか、コンビニの店員さんが外国ルーツの方だなというのがすごく多くなっていると思うんです。僕が働いている須磨も今年に入ってきた子たち、3人ぐらい外国籍です。やはり、そういう子た

ちの受入先になるのも大事なことだと思うんですけど、そういうところも一つ加味してもらってちょっと検討していただいたほうがいいんじゃないかなと思っています。

もう1個は、ちょっと話が変わりますが、施設不足とかも含めて日本はずっと、国連とかを含めてずっと先進国の中で唯一分離教育をしている勧告をずっと受けています。要は、統合教育をしないという特別支援というところに障害を持った人たちを置いて、一般の子たちは一般の子たちというやり方をずっとしてきていて、それをやはり先進国としては間違っているという勧告をずっと受けています。御存じだと思いますが、それが芦屋とか、僕がこの前にちらっと聞いたら一緒にしているという話をちょっと聞きました。やはり、自分が神戸に来て初めてなかよしの子を持ったりとかしたときに思ったんですけど、やはり一般のクラスの子たちがすごく育つなど、これはいいなと思ったんです。やはり障害をある子を受け入れることで、そういう子たちと共に生きていく社会なのかなというのを知るといのはすごい大事だなと思ったんです。それで、それを障害をある人たちに社会を変えていこうとか合わせていこうという力を求めるより、僕ら啓発提起している側の人間がそういうことを考えて社会を変えていこうというほうがやはり現実的かなと思うので、そういうふうに神戸市の特別支援教育というのをなるべく統合教育との方向に大きくかじを切るみたいな考えは全然ないんですか。

(市) 外国籍のほうは現状を確かに把握しておりまして、神戸市として必ず、今も数をいっていたんですけども、よく時々あるのが、とにかく外国籍だから特別支援学級や特別支援学校にまず入りましょうというのがあるんですけど、それは神戸市はしていない。必ず子供の認知、本当にどうなのかを見極めて、特別支援学級だったり特別支援学校に入れていくのはこれまでもしてきましたので、それはしていきたい。

インクルーシブなんですけども、私たちも国が今やっていますように多様な学びの場をしっかりとつくと。なので、今は自校通級をどんどん増やしているになりますし、特別支援学級も病弱であったり、必要だったら病弱学級も地域の学校にどんどん今つくろうとしております。

もう1個は、先ほど話をしました特別支援学校にどんどん子供たちが入っていることなんですけども、そこにはやはりその子供たちが本当に特別支援学校でなければというのはありますので、そこについては個別最適、柔軟な学びへの変更というのを私たちは率先してやっていきたい。そのために特別支援教育相談センターがあります。なので、柔軟な子供の可能性を伸ばしていくため、私たちは「あなたは特別支援学校に行ってから卒業までずっと支援学校ですよ」とは決して考えていません。必要な場合だったら地域の小学校の特別支援学級に行けばいい。高等部のときも神戸支援学校の高等部でなく、定時制高校や単位制の高校ですね、後はサポート校と言われる通信制と提携しているそういう学校がありますので、そういうところで一番その生徒に合ったところというのを、そういうのを個別最適で個々に考えていくのが大事だというのは私も校長にも伝えておりますので、神戸市の特別支援教育に対しての指針としてセンターを軸としてこれからもやっていきたいと思っておりますので、そういう目で先生方も見ていただいて、どこだったら一番伸びるかというの

は保護者や本人と相談していただければと思います。

- (組) 神戸市としては、将来的にも特別支援学校という制度を堅持したまま、要は、普通・なかよしと一般の学校に行くという、いろんな選択肢がある中でやっていこうというのが今のところ考えているんですか。
- (市) 今の文科省の考えは、多様な学びの場の設備、特別支援学校はやはり文科省においてありますので、それはやはり神戸市としても多様な学びの場の一つとしての特別支援学校というのは置いておき、そこで伸びる子たちが入って学ぶというようにしていきたいと考えています。
- (組) そういう子たちはやはり確かにそういう場が絶対に必要だと思うんですけど、方向としては、例えば学校を建てなくても既存の小学校や中学校にプラスしていく形でそういう子たちを受け入れる場所をどんどんつくって、そっちに行く方向を増やしますというふうにやはり神戸市は率先してやっていったほうが、もちろん啓発して、もちろん人の配置をしようとか、やはり、いろんな障害児教育の実践とか各国のものを見ていても、やはり子供たちの成長にとっていいんじゃないかと僕は個人的に思っています。そういうこともぜひ前向きに考えながら、施設が不足しているのを解消するという意味でもやっていただきたいなと思っています。
- (組) 多様な学びの場を、骨格を、やはり僕は環境が障害を無くしていくと思うので、やはりその環境の一つに、一番大きいのは人的配置というか人の手だと思うんです。やはり特別支援教育だからこそ人がいないと個別に合わせたそれぞれの成長発達に、やはり枠に納めていくような教育ではなくて子供たちの成長発達に合わせていくような支えができるような環境ができないと、絶対に絵に描いた餅になっちゃうと思うので、それはよくお分かりだと思うんですけど。やはり人的配置を、まずは一番厳しいのは特別支援学級だと思うんです。そこに人の手をちゃんと補完資金面でも当てていただきたいなとは思っています。
- (市) それでは続きまして、教科指導課との交渉に移らせていただきたいと思います。
- (組) こちらは書記次長の〇〇からお話させていただきます。
- (組) 青陽須磨支援学校の〇〇です。本日はお忙しいところ、ありがとうございます。よろしく申し上げます。

今、ちょっと資料を配らせていただいたんですけど、毎年同じお話をさせてもらっているんですが、交渉内容のほうで、一つ目の全校一斉学力悉皆調査を中止して抽出調査に戻すよう国に強く求めていただきたいです。

2点目は、神戸市学力定着度調査という学力調査も中止していただきたいと思っています。その理由をこの資料を使って簡単にお話をさせてください。

まず、この資料ですが、1枚めくっていただくと、「全国学力テストはなぜ失敗したのか」という標識で入っているんですが、バンさんという方が全国学力調査の専門家会議の委員だった方です。大学の先生で、この方に資料を使っていいですかとメールで聞いたらどうぞと言われたので使わせていただいているんですが、この方が学力テスト、日本の学力テストの今やっているものが失敗しているよという話をしているんです、それを要約しています。ちょっと説明させてください。

1枚目のレジュメのほうを見ていただいて、まず、テストそのものの考え方について説明させてください。テストは、実はIRTとCTTという2つのテストは専門的な用語であると言われていまして、3枚目をめくっていただくと、①と手書きで書いてあるところがあります。IRTというテストの特徴というのが、受験する人の学力とは別に個別のテストの設問に個別の難易度があるというふうに考えるテストだと思ってください。どういうことかと言うと、例えば問題が1から5問まであって、ABCDEとあったら、Aは難易度が5、Bは難易度が4、Cは難易度が3、Dは難易度が5とか、そのテストの問題自体に難易度が設定されています。なので、レジュメに今度いっちゃうんですけど、そのテストで今年はAの代わりにFと同じ難易度のものをもっていって入れ替えれば、テスト自体の難易度は変わらないけど問題は変わったテストができるというのがIRTというテストの設計なんです。PISAとかゴールとか有名な全世界的にやっているテストは全部その設計でやっているみたいで、要は、テスト自体の難易度を変えないで毎年違う問題を出そうということを専門的にやっているテストが簡単に言うとIRTです。それに対して、日本の学校全部でやられている100点満点のテストというのは古典的テスト、CTTと言います。こっちに関しては、実は問題の難易度は変わると言われています。IRTみたいに細かい設計をしていないので、違う問題を出しているだけで、実はその難易度が変わっているからテスト自体の難易度が毎年変わっちゃうということをこの著者の方は指摘しています。なので、一つ目としては、PISAとかがやっているようなIRTという項目反応理論というのは採用していないので、結局、子供の学力が上がっているのかテストの難易度が変わっているのか分かりませんよという指摘を専門家の方がされているんです。なので、我々の学力テストというもので上がった下がったと言っているのが、本当に子供の学力か分からないという指摘をされています。なので、それが1点目として、今やっている学力テストは全部やめるべきですということを全教としてお伝えしている理由の一つです。

次が、2つ目の四角でSESについてというのが②にあります。4枚目をめくっていただくとグラフが載っていて、就学援助率というのが出ているんですが、全世界模擬試験PISAは、社会経済的背景調査というのをテストと同時にやっています。要は、経済的にどれぐらいの位置にあるのかというのを絶対調査するんです。でも、教員の中でも常識だしそういうテスト枠とかそういう部分でも常識みたいですけど、経済力と学力は強い相関関係があります。西日本の自治体で調査されたこの学力テストの結果と就学援助率の相関を調査したのがこの図の3です。結果は、就学援助率が10ポイント上がったならおよそ4.4ポイント子供の正答率が低下する傾向があるというのが分かると書かれています。ほとんどの学校で同じ結果が出ていて、結局教員とか学校の力よりもそっちの力のほうがはるかに影響力があるというのが、このゆさんが言うには常識としてなっているというのが調査で出ているんです。それで、さらにこ5ページ目です。4年生から中学3年生までの学力を追っかけて調べていったデータが5ページ目の②—2というところの左側の学力という図で載っているんですけど、この結果も要は、これ結局、例えば小学校5年生が駄目だったけど中学校3年生まで努力したら上がった子がいるんじゃないか、要は

学力テストの結果を受けて反映してやったら改善するんじゃないかということを考えて調査されているんですけど、実際はこのAからDまで4パターンしか存在しないんです。結局、これがずっと同じ学力の位置にいる子しかいないということで、上がったりと下がったりというのがほとんど起きてないんです。要は、小4の成績が中3までずっと続く、SESに関してはですけど、なので成績の高い子というAの分類に入る子たちは、要は学力がこうやって上がっている子たちは就学援助率が9%だったのに対して、低いDの子たちというのは、ずっと下にいる子たちは50%就学援助を受けているんです。だから、ちょっと難しい話を早くしているのもまた後で資料をぜひ読んでほしいんですけど、結局子供自身の学力とは教員の力とか学校の力よりも経済的な力がすごく大きいのに、そこを日本の学力テストは全然無視していて、神戸市でやっている学力テストもそれを無視しているから、本当に子供たちの学力を上げようとか調査しようと思っているんだったら、ほぼほぼ意味ないですよというのがこの川口さんの結論なんです。こういうケースを正論でやられている方がそういうことを言っているということが2点目です。

3番目の四角なんですけど、悉皆調査ということで、悉皆自身というのは③なので、資料6枚目のところに③と書いてあるんですけど、分かりやすいので最初のレジュメで書き抜いています。悉皆の実施というのは結局各学校の成功平均率が計算できるので、結果が関係者に大きな影響を与える種類のテストになります。テストのそういう学問の中では「ハイスイクスなテスト」と名前もついています。どうということかということ、そういうハイスイクスなテストというのは不正を行う要因が働くんです。例えば、大阪なんかやっていますが、子供たちのテストの結果と教員の評価を連動させているので、「じゃあ子供たちにいい点取らせなきゃ」という要因が絶対に働くんです。簡単なのは答えを教えたらいいとかカンニングしたらいいとか、いろいろなところから報告が来ています。これは実際に書いていますが、受験者に答えを教えたり成績の悪い子を休ませるということが全国で起きています。こういう不正が起きるため、結局正しいデータが取れない、改善に生かすことができない。だから、本当に子供たちの学力向上や調査ということを考えるのであれば、「はい、突然テストしますよ、今年」という形の抽出のほうが確実だということを川口さんだけじゃなくてこういう学問の世界では常識として言われています。だから、本当に神戸市が掲げているみたいに学力調査を子供たちの実態を調べるためだと言うんだったら、まず悉皆をすぐやめていただきたいです。他に意図があるんだったら、逆に正直にこういう意図でやっていますと教えてもらいたいぐらいです。これ、毎年言っていますが、全然変わらないので、ぜひ、これをよく読んで検討していただきたいと思います。

最後のページの④でちょっと補足につけているんですけど、そもそも学力低下論、日本が学力テストを始めたのはゆとり世代がテストの成績が悪かったからだよねという時代背景があったと思うんですけど、最初に話すとIRTのテストという、項目反応理論というテストの問題ごとに内容があるよという話に戻るんですけど、このPISAの担当の調査設計をしていた人がテスト設計をミスったから日本の学力が落ちたのかもしれないということをテストが終わった後に言ってたんです、本当

に学力が上がったのが下がったのというのをそんなに大きい範囲で細かく調べるのは、実はめちゃくちゃ大変なことなんだなというのを僕もこの本を読んでよく分かったんですけど、だから、今やっている神戸市の学力テストもそうだし、日本の全国の学力テストもすごく荒いんです。本当に役に立っているのという話をこの本を読んだらすごく分かるので、今、すごく短く要約したんですけど、ぜひこれを読んでいただいてすぐに来年からやめていただきたいなと思っています。

以上です。

(市) 今のテストの件については、こちらは管理運営事項ですので、答えかねます。